毒蛇の喩え

――第26三啓経の梵文テキストと和訳――

松田和信　出本充代　上野牧生
田中裕成　吹田隆徳

1 まえがき

この3年ほどの間に、本稿の共著者のひとり（松田）によって、アシュヴァゴーシャ（馬鳴）に帰せられる40種の三啓経（tridaṇḍa）を書写した梵文写本『三啓集（*Tridaṇḍamālā*）』の部分的な解読研究の成果が複数発表されている[1)]。写本はアティシャ（Atiśa, Dīpaṃkaraśrījñāna）によって11世紀にインドからチベットにもたらされ、中央チベットのポカン（sPos khang）僧院に保存されていたが、写本自体はポカン僧院で既に失われたものと思われる[2)]。ただ、1939年にイタリアのツッチ（Giuseppe Tucci, 1894-1984）が現地で撮影した写真、およびツッチ写真のネガから別に焼かれたラーフラ・コレクションの写真によって解読が可能となった。

40種の三啓経のそれぞれは三つの部分（daṇḍa 啓）よりなり、第1ダンダと第3ダンダに配された、主として既存のアシュヴァゴーシャ作品から借用されたと思われる偈によって第2ダンダに置かれた阿含経典を挟み込むという体裁の読誦文献が三啓経である。写本から40種以上の阿含経典の梵文原典が回収されることも貴重ではあるが[3)]、それ以上に、アシュヴァゴーシャが著した仏

1）松田和信2019, 2020a, 2020b, 2020c, 2021a, 2021b, 2022.　さらに『三啓集』に関連する論攷として上野牧生2020, 2021、田中裕成2020を参照されたい。
2）加納和雄2020：(196)-(197)参照。
3）40種の三啓経には単一の阿含経典を用いる場合と、複数の阿含経典を組み合わせている場合があり、阿含経典の総数は40種を超える。

伝『ブッダチャリタ』の第14章後半以降の失われたと思われていた偈に加えて、今まで知られていなかったアシュヴァゴーシャ作品の偈、特にカーヴィヤ調の韻文で綴られた阿含経典解釈論と推定されている『荘厳経論（*Sūtrālaṃkāra*）』の偈が多く見いだされることに巨大な資料的価値が認められる。しかし、あまり鮮明とは言えない写本写真の問題と、第1ダンダと第3ダンダに置かれた偈の読解の困難さから、共著者の松田によっても、松田の共同研究者である独ミュンヘン大学のイエンス=ウヴェ・ハルトマン（Jens-Uwe Hartmann）によっても、40種の三啓経のひとつとして未だ完全な形では公にされていない[4)]。

このような状況から、三啓経のいずれかひとつでもその全体像を明らかにすべく、松田は、大谷大学の上野牧生と、佛教大学の田中裕成および吹田隆徳、さらに独マールブルク大学の出本充代を加えた5名で、2021年の夏から冬にかけて、定期的に研究会を開く形でひとつの三啓経の解読を行った[5)]。研究会で取り上げた三啓経は『三啓集』において26番目に書かれている「毒蛇経 *Āśīviṣa*（雑阿含1172）」である[6)]。これを選んだ理由は、写本写真の一部に不鮮明で解読不能箇所が見られるものの、ほぼ全体を読み取ることができ、さらに第1ダンダと第3ダンダに用いられた未知のアシュヴァゴーシャ作品偈は、他の三啓経に多くに見られるような、単に世の無常を詠嘆するだけでなく、身体（四界、五取蘊、六根）とアートマン（ātman）をめぐる教義的な内容を持ち、アシュヴァゴーシャ自身の思想を考察する上でも極めて重要な資料になると思われたからである。また、第2ダンダの雑阿含1172経も、その中に説かれる毒蛇の喩えは教団文献あるいは大乗文献を問わず、様々な文献中に引用あるいは言及されるが、この経典の梵文原典はわずかな断片しか知られていなかった。しかも、『三啓集』写本では奇しくも次に書かれている第27三啓経の「灰河経 *Kṣāranadī*（雑阿含1177）」と併せて、この経典は、阿含からアビダルマ論書が成立していく

4）イエンス=ウヴェ・ハルトマンも単著論文を3点、松田との共著論文を2点、Péter-Dániel Szántó および松田との共著論文を1点執筆しているが、いずれも現時点（2022年1月）では未刊あるいは印刷中である。
5）イエンス=ウヴェ・ハルトマンにも適宜我々の解読を検証してもらったことを付記しておく。
6）以下本稿では『毒蛇経』というタイトルを用いる。

過程、特に阿含を基に説一切有部の修行体系が成立してゆく過程と無関係ではない重要経典のひとつと見なされるからである。本稿では、研究会で得られた第26三啓経全体の梵文テキストと和訳を提示し、その後で必要な解説を加えるが、これよって、ひとつの三啓経の全貌を初めて紹介するとともに、アシュヴァゴーシャ研究および阿含研究、さらにはアビダルマ研究に資する基本資料のひとつを梵文原典とともに提供することになる。

2 梵文テキストと和訳

第26三啓経の第2ダンダに使われた『雑阿含』1172経の『毒蛇経』（大正99，2巻313b-314a）については、平行経が漢訳『増一阿含』と「パーリ相応部」に含まれるほか[7)]、チベット語訳で残るシャマタデーヴァの倶舎論注釈書（**Upāyikā*）にも全文引用される[8)]。梵文原典についても、ドイツ探検隊の収集したトルファン写本コレクション（SHT 1099）と大英図書館のヘルンレ・コレクション（Or. 15009/252）に含まれる断簡が知られている[9)]。第26三啓経では、第2ダンダの『毒蛇経』を挟んで、第1ダンダに18偈、第3ダンダに10偈が置かれている。その構成を内容に従って偈番号と共に示せば以下の通りである。なお偈番号は便宜上本稿で任意に付けたもので、写本に偈番号が書かれているわけではない。

1）第1ダンダ

1.1）三宝および説一切有部師への帰敬偈　**1-6**

1.2）アシュヴァゴーシャ作品偈

1.2.1）四匹の毒蛇に喩えられる四界　**7-11**

7）『増一阿含』大正125, 2巻669c-670a, Pāli SN. 35.197 Āsīvisa (PTS ed., v. 4, pp. 172-175), Chung 2008：81参照。『大智度論』にも『毒蛇喩経』の名でこの経典が言及される。大正1059, 25巻, 145b (Lamotte 1949：702 ff.).

8）本庄良文教授の整理番号で3029番の引用。本庄良文2014：339-343. Tib. D. ed., 130a7ff., P. ed. 149b5ff.

9）榎本文雄1985：83-84, Karashima and Wille 2009：259-261（Or. 15009/252は長島潤道氏が担当して解読）。

1.2.2）五人の敵に喩えられる五取蘊　**12-16**

1.2.3）世間を焼く喜貪（nandīrāga）**17-18**

2）第2ダンダ — 阿含経典（毒蛇経）

3）第3ダンダ

3.1）アシュヴァゴーシャ作品偈

3.1.1）六根・六識とアートマン　**1-6**

3.1.2）すべてを破壊する対境（六境）**7-8**

3.2）ブッダの教えを讃える定型偈　**9-10**

他の三啓経に見られる内容構成では、第1ダンダのアシュヴァゴーシャ作品の複数偈の前に、それらの偈を導入する1偈、さらに第1ダンダ末には経典を導入する1偈が置かれるが[10]、ここではそれらの偈は省かれ、第3ダンダでも同様の省略が見られる。さらに、第26三啓経に特異な点は、第1ダンダ冒頭の三帰依に続いて、他の三啓経には見られない説一切有部の師に対する帰敬偈が置かれている点である。これによって、三啓経の編纂者がアシュヴァゴーシャ自身であれ、それより後代の人物であれ、説一切有部教団に属する人物であったことが見てとれる。韻律については、第1ダンダに3種[11]、第3ダンダに8種[12] 用いられている。第3ダンダの偈数は十にすぎないことから、多彩な韻律が駆使されていることが分かる。以下の梵文テキストでは（Ms. 65v4-69v1）[13]、代用アヌスヴァーラを元に戻し、子音の重複を削除あるいはその逆を行うなど[14]、写本に見られる読みを正規形に断りなく修正し、ダンダについても文意に沿って削除、追加を行った。ダンダを挿入、削除した箇所はサンディも断りなく修正し

10）三啓経の基本的構造については松田和信2022参照。

11）Nos. 1-6 = Śārdūlavikrīḍita (19 × 4), nos. 7-16 = Vasantatilakā (14 × 4), nos. 17-18 = Śikhariṇī (17 × 4).

12）No. 1 = Śarabhā (14 × 4), no. 2 Śālinī (11 × 4), nos. 3-5 = Vasantatilakā (14 × 4), no. 6 = Śikhariṇī (17 × 4), no. 7 = Suvadanā (20 × 4), no. 8 = Śārdūlavikrīḍita (19 × 4), no. 9 = Sragdharā (21 × 4), no. 10 = Upajāti (11 × 4).

13）『三啓集』の梵文写本は全体で115葉の貝葉からなる。松田和信2022注2参照。

14）例えば、dharmma を dharma に、satva を sattva に断りなく修正する。

た。また、アヴァグラハは多くの箇所で書かれていないが、括弧を用いずに補った。ただし、文字の読みを修正した箇所については元の読みを注記する。なお、第2ダンダの経典部に見られるが、梵語化される元になったであろう中期インド語テキストの名残と思われる語形については、梵語の正規形には修正しない。和訳については、第1ダンダと第3ダンダは偈毎に、第2ダンダは任意に分けた経典の段落毎に加える[15]。

第1ダンダ

yo jānann api «janma»duḥkham atulaṃ śakto 'pi yātuṃ śamam
sattvānām upaśāntaye karuṇayā babhrāma kalpān bahūn |
tyaktvā cātmagataṃ mahac chamasukhaṃ dharmaṃ parebhyo 'bravīt
sarvajñāya niruddhasarvagataye buddhāya tasmai namaḥ || 1 ||[16]

比べようもない（atula）生苦（janmaduḥkha）を知り、寂静（śama）に向かうことができたのに、有情の寂静（upaśānti）のために慈悲（karuṇā）をもって多くの劫（kalpa）を彷徨い、寂静による大いなる自分の安楽を捨てて、他の人々に教え（dharma）を説いた、一切智者にしてすべての〔輪廻の〕趣（gati）を断滅したブッダ（仏）に帰命する[17]。

yaḥ sattveṣu paribhramatsv aharahar lokeṣu nāvarta(65v5)te
yo bhāvavyayadharmako bhavagatau nodeti na kṣīyate |
yasmin janma na vidyate na maraṇaṃ na vyādhayo nādhayaḥ
sarvakleśaparikṣayāya mahate dharmāya tasmai namaḥ || 2 ||

有情が日々彷徨っても、〔輪廻の〕世界を転ぜず、生存の趣（bhavagati）においては生起（bhāva）と滅（vyaya）を本質とするも、〔それ自体は〕生ぜず、滅せず、その中には生もなく、死もなく、病もなく、苦悩（ādhi）もない、すべての煩悩の滅尽を有する偉大なる〔ブッダの〕ダルマ（法）に帰命する。

15）梵文テキストには以下の記号を使用する。[ ] 写真では不明瞭な文字　< > 補った文字・句読点　« » 欄外に修正された文字。

16）第1ダンダ冒頭部の三帰依偈は基本的には三啓経毎に異なるが、第26三啓経の三帰依偈（第1偈から第3偈）は例外的に第13三啓経（舎利弗般涅槃経 **Śāriputraparinirvāṇa-sūtra*）の三帰依偈と同文である。本稿での梵文校訂に当たっては第13三啓経の該当箇所（Ms. 24r1-3）も参照した。

17）この偈は漢訳『三法度論』の帰敬偈と同じであるが、それについては本稿で後述。

yo loke prabhavāntayor vivadite niḥsaṃśayo niścalas
tṛṣṇāhetukam udbhavaṃ svavagatas tṛṣṇākṣayān nirvṛtim |
puṇyakṣetram a(66r1)nuttarañ caraṇavan mārge phale ca sthito
lokasyārcyatamāya «puṇya»nidhaye saṅghāya tasmai namaḥ || 3 ||

世間が生起（prabhava）と滅（anta）について言い争っている時でも、疑いを持たず、動揺せず、渇愛（tṛṣṇā）を因とする生起（udbhava）と渇愛の滅尽（kṣaya）による寂静（nirvṛti）をよく理解しており、〔良い〕行いのある（caraṇavat）無上の福田（puṇyakṣetra）であり、道と果に住し、世間に最も尊敬されるべき福徳の蔵（puṇyanidhi）である〔ブッダの〕サンガ（僧）に帰命する。

ye paśyanty anupūrvaśo 'bhisamayaṃ bhāva<ṃ> cyutasyāntarā
svargastheṣv api satsu dharmacaraṇaṃ kālatraye 'vasthitam |
na dhyānaṃ prathamaṃ phale vimalatā<ṃ> cittasya na prākṛtā<ṃ>
tā«n*»[18] vande paramārthayogaviduṣaḥ[19] sarvāstivādā«n» gurūn || 4 ||

漸次の（anupūrvaśas）現観（abhisamaya）と、死せる者（cyuta）の中間の状態（antarā bhāva）と、天界に住む者たちであっても法（dharma）を行ずることと、三時（kālatraya）に分位する〔存在〕を認め、〔預流〕果における初静慮を〔認め〕ず、心（citta）の本性的な無垢性（vimalatā）を〔認め〕ない、勝義のヨーガ（paramārthayoga）を知る説一切有部（sarvāstivāda）の師（guru）たちに帰命する[20]。

ye samyakpratipattiyo(66r2)[gavibhavāt prāpsya]nti duḥkhakṣayaṃ
nairātmyābhiratāryamārgakuśalāḥ prajñendriyālaṃkṛtāḥ |
lokaṃ śūnyam anātmam adhruvam imaṃ paśyanti ye prajñayā
tān vande paramārthayogakuśalā«n» buddhātmajā«n»ś chrāvakān || 5 ||

正しい行（samyakpratipatti）の実践による威力（yogavibhava）によって苦の滅尽を得るものとなり、無我（nairātmya）を楽しみ、〔八〕聖道（āryamārga）に巧みであり、慧根（prajñendriya）に飾られ、慧（prajñā）によってこの世間を空（śūnya）であり無我（anātman）であり不堅固（adhruva）であると認める、

18）Ms. nā«n*».
19）Ms. parārthayogaviduṣaḥ.
20）この偈は説一切有部が認める教義を4項目、有部が認めない大衆部の教義を2項目紹介するが、この偈のテキストと和訳についてはすでに松田和信2021a：66-67で紹介されている。

勝義のヨーガに巧みなブッダの子（buddhātmaja）である声聞たちに帰命する。

buddhāya praṇipatya lokaviduṣe dharmāya saṅghāya ca
svācāryān nikhilāṃ«ś ca» yogivisarān saṃpūjya saṃpṛcchya ca |
dharmasya (66r3) sthi[taye] ⏑ – ⏑ ⏑ ⏑ – śreyo'rthināṃ śreyase
nānāmārgaparigrahāṃ parikathāṃ vakṣyāmy ahaṃ tattvataḥ ‖ 6 ‖

世間を知るブッダ（仏）およびダルマ（法）とサンガ（僧）に平伏し、すべての我が師（svācārya）たちと多くの瑜伽行者（yogin）に敬意を表し、問い合わせて、法（dharma）の安住のために、・・・のために[21]、至福を求める者たちの至福のために、様々な道を包括する教誡（parikathā）を私は真実をもって説こう。

anyonyavigrahakarāṃś caturo yathogrān
āśīviṣān satatam ekakaraṇḍasaṃsthān |
bhītaḥ parityajati dehagatān tathaiva
dhātūn jalajvalanabhūmyanilā«n» vijahyāt ‖ 7 ‖

〔毒蛇を〕恐れた者が、一つの籠（ekakaraṇḍa）の中にあって常に互いに喧嘩している四匹の毒蛇を捨てるように、身体の中にある（dehagata）地（bhūmi）水（jala）火（javala）風（anila）の〔四つの〕要素（dhātu 界）を捨て去るべし。

kruddho yathā hy ativiṣo 'nyatamaś catu(66r4)rṇām
āśīviṣo 'pa«ri»hṛto niyataṃ vadhāya |
dhātus tathā niyatam anyatamaś caturṇāṃ
kopaṃ ya eva samupaiti sa eva hanti ‖ 8 ‖

四匹の怒り狂った猛毒の毒蛇のいずれか一匹でも捨てないなら、必ず〔その人の〕殺害を結果するように、怒りに達した四つの要素（界）はどれでも必ず〔その人を〕殺すのである。

āśīviṣād api ca ghoraviṣāt kadācit
syāt svasti mantravidhibhir mahatām ṛṣīṇām |
dhātūrageṇa tu śarīragatena – ×
[kā]le prakṛṣṭamanaso munayo 'pi daṣṭāḥ[22] ‖ 9 ‖

21）写真の状態が悪く、この箇所の6文字を確信を持って読むことができない。ただ、3文字目と4文字目は ṇāya と見えることから、ここには為格の語が置かれていると推測できる。恐らく、c句は教誡を説く目的を3項目挙げているのであろう。

大仙たちは、呪文（mantra）〔を唱える〕方法によって、時には猛毒の毒蛇から安全であるやもしれぬ。しかし、優れた心もてる牟尼たちであっても、身体の中にある（śarīragata）要素という蛇（dhātūraga）に時には咬まれるのである。

āśīviṣā jagati sarvagatā na santi
sarvatra ye na na bhayaṃ puruṣasya tebhyaḥ |
(66r5) dhātūn ṛte khalu ca nāsti śarīrabandhaḥ
te yatra tatra ca vadho niyataḥ prajānām ‖ 10 ‖

世間では、毒蛇はどこにでもいるわけではない。それ〔毒蛇〕がいない所はどこでも、人にはそれに対する恐怖はない。一方〔四つの〕要素（界）なくして身体の連結（śarīrabandha）はありえない。それらの〔要素〕がある所ではどこでも必ず人は殺される。

sarpebhya eva ca na mṛtyubhayaṃ prajānāṃ
tebhyaḥ kvacid bhavati kasyacid eva mṛtyuḥ |
dhātvāśraye sati bhavanti bahūni loke
dvārāṇi jīvitavighātakarasya mṛtyoḥ ‖ 11 ‖

蛇によって必ず生類たちに死の恐怖があるのではない。ある所で、ある人だけが、その〔蛇に〕よって死ぬのである。〔しかし、四つの〕要素を依りどころとする〔身体〕がある限り、世間には、命を害する死の門が沢山あるのだ。

apy eva śāntim upayānty arayaḥ saśastrāḥ
kaṃcid guṇaṃ samupa(66v1)labhya kṛtajñabhāvāt |
skandhā«ḥ» śrameṇa mahatāpy upacaryamāṇā
na tv eva śakyam akṛtajñatayā grahītum ‖ 12 ‖

もしかすると、剣を持った敵たちでさえ、報恩の性質（kṛtajñabhāva）があるから、何らかの見返り（guṇa）を得たら大人しくなるやもしれぬ。しかし、大きな努力をもって仕えても、忘恩（akṛtajñatā）の性質があるから、〔五取〕蘊（skandha）を御すことは不可能である。

22）写本ではd句は欠落している。後述のトルファン写本 SHT 378a より補う。さらに、写本ではc句末は daṣṭaḥ と書かれているが理解できない。現時点では復元不能につき、暫定的に韻律記号のみ挿入し、和訳では省略する。

pratyarthinaś ca vadhakāḥ pragṛhītaśastrāḥ
śakyaṃ guṇair api śarair api vābhihantum[23] |
dharmasthitair api balair api labdhaśabdaiḥ
skandhā na śakyam apavartayituṃ svabhāvāt ‖ 13 ‖

剣を持った敵意ある殺し屋たちは、見返りによっても、矢によっても打ち負かすことができる。しかし、法（dharma）に住する者によっても、名声を得た軍隊（bala）によっても、蘊を自己の存在性（svabhāva）から分離させることはできぬ。

dṛṣṭvetaraṃ param anarthakaraṃ kadācit
pratyarthinaḥ pratinudanti na cātmapakṣaṃ |
(66v2) svāṃ yonim agnaya ivonmathanena jātāḥ
skandhāḥ svam eva viṣayaṃ bhuvi nirdahanti ‖ 14 ‖

時に、不利益を作る他人を見て、敵意ある者は〔その人を〕追い払っても、自分の側の者を〔追い払ったりし〕ない。〔しかし〕摩擦によって生じた火が自分の火床を〔焼く〕ように、蘊は地上で必ず自らの対境（viṣaya）を焼く。

skandheṣu satsu ripavo vadhakā bhavanti
na hy agnayo vanatarūn asato dahanti |
skandhāśrayād arim ṛte 'pi ca nāśam eti
pratyuṣadīpa iva kālavaśena lokaḥ ‖ 15 ‖

蘊が存在する時には、殺し屋である敵が存在する。実に、火は存在しない森の木々を焼くことはない。蘊を依りどころとするから、敵なくしても世間は時の力（kālavaśa）によって滅に至る。あたかも夜明けの灯火（pratyuṣadīpa）が〔時の力によって滅に至る〕ように。

yair nityataś ca sukhataḥ śucitaś ca mithyā
skandhāḥ kṛtāḥ satatam ātmata eva cājñaiḥ |
dṛ(66v3)[ṣṭyā]śrayā hi na bhavanty arayas tato 'pi
pāpāśrayād dhi suhṛdo 'pi bhavanty amitrāḥ ‖ 16 ‖

無知な者たちによって、常、楽、浄なるものとして、また常にアートマン（我）そのものとして蘊が誤って語られる（mithyā kṛta）が、そのような者たちから

23）Ms. nābhihantum*.

すれば、〔邪な〕見解の依りどころとなる〔蘊〕は敵とはならない。実に、邪な〔見解〕を依りどころとするから、友人も敵となるのである。

vadhārthaṃ saṃkliṣṭaḥ[24] suhṛd iva samaḥ syāt svanuguṇo
guṇair dṛṣṭaḥ samyag bhavati ripur ante 'pi ca suhṛt |
sukhāsvādasūkṣmo viṣayaparibhogāya capalo
jagan nandīrāgo dahati hi[25] nigūḍho 'nala iva || 17 ||

殺害目的で〔やって来た〕汚れた者も、友人の如く善良で、とても有益な者（svanuguṇa）であるかもしれぬ。〔そのような〕友も、利点（guṇa）〔という観点〕によって正しく眺めてみれば、結局は敵なのである。実に、安楽の味に鋭敏で、対境（viṣaya）を享受するために揺れ動く喜貪（nandīrāga）も、隠れた火のように〔結局は〕世間を焼く。

ihaiva pratyakṣaṃ bhavati bhayam antaścara(66v4)kṛtaṃ
na dharmaṃ na jñānaṃ dahati ripur āyus tu harati |
mano nandīrāgaḥ prathamam iha dagdhvendhanabalaṃ
vipāke ni<r>vṛtte jagad idam amutrāpi dahatīti[26] || 18 ||

今生ではまさに現前に、顔見知りの（antaścaraka）〔敵〕によって作られた恐怖があるが、敵は命を奪っても、法（dharma）を焼いたり、智（jñāna）を焼いたりはしない。喜貪は、最初に今生で薪の軍勢（indhanabala）〔のように燃えやすい自身の〕心（manas）を焼き、異熟が生じた時には、来世でもこの世間を焼く。

第2ダンダ（毒蛇経）

evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye bhagavān śrāvastyāṃ viharati jetavane 'nāthapiṇḍadasyārāme | tatra bhagavān bhikṣūn āmantrayate[27] sma |

このように私は聞いた。あるとき世尊はシュラーヴァスティ（舎衛城）のジェー

24）saṃkliṣṭaḥ を saṃśliṣṭaḥ と訂正して読むべきかもしれないが、現時点では判断できない。訂正した場合の翻訳は「殺害目的で寄り添っている者」となる。
25）Ms. ha.
26）iti は偈を閉める語で、第18偈は dahati で終わる。
27）Ms. āmamantrayate.

タ（祇陀太子）の林、アナータピンダダ（給孤独長者）の園（祇園精舎）に留まっていた。そこで世尊は比丘たちに言った。

[1] tadyathā bhikṣavaḥ iha[28] syuś catvā(66v5)ra āśīviṣā «u»gratejaso ghoraviṣā ekakaraṇḍe prakṣiptāḥ | atha puruṣa āgacched abālajātīyo «'»mūḍhajātīyaḥ saprajñajātīyaḥ sukhakāmo duḥkhapratikūlo jīvitukāmo[29] na martukāmo maraṇapratikūlaḥ | taṃ kaścid evaṃ vaded | ime te bhoḥ puruṣa[30] catvāra āśīviṣā ugratejaso ghoraviṣā eka(67r1)karaṇḍakaprakṣiptāḥ kālena kālam udvartayitavyāḥ kālena kālaṃ snāpayitavyāḥ kālena kālaṃ bhojayitavyāḥ kālena kālaṃ samyak sukhena parihartavyāḥ | yadā te bhoḥ puruṣa eṣāṃ caturṇām āśīviṣāṇām ugratejasāṃ ghoraviṣāṇām ekakaraṇḍakaprakṣiptānām anyatama āśīviṣaḥ prakupyet tadā tvaṃ maraṇaṃ vā nigacche(67r2)r[31] maraṇamātrakaṃ vā duḥkham | yat te bhoḥ puruṣa[32] kṛtyaṃ vā karaṇīyaṃ vā tat kuruṣva |

比丘たちよ、例えばここで一つの籠（karaṇḍa）に入れられた、勢力絶大（ugratejas）で激しい毒のある（ghoraviṣa）四匹の毒蛇（āśīviṣa）がいるとしよう。さて、愚者の類いではなく、愚鈍の類いではなく、智者の類いで、安楽を望み、苦を厭い、生きようと欲し、死のうと欲さず、死を厭う一人の男がやって来るとしよう。〔すると〕ある者がその男にこのように言うとしよう。「おい、男よ、お前は一つの籠に入れられた勢力絶大で激しい毒のあるこれら四匹の毒蛇に時々油を塗り、時々沐浴させ、時々食べさせ、時々快適に過ごさせてやらねばならぬ。おい、男よ、お前に向かって、一つの籠に入れられた勢力絶大で激しい毒のあるこれら四匹の毒蛇のいずれか一匹の毒蛇が怒り出すとしよう。その時、お前は死に到るかもしれぬ。あるいは死に等しい苦痛に〔到るかもしれぬ。〕おい、男よ、お前はなすべきことあるいは務めを果たせ。」

[2] atha sa puruṣo bhītaś caturṇām āśīviṣāṇām ugratejasāṃ ghoraviṣāṇām ekakaraṇḍakaprakṣiptānāṃ yena vā tena vā niṣpālāyeta | taṃ kaścid evaṃ vadet | ime te bhoḥ puruṣa[33] pañcotkṣiptāsikā vadhakapuruṣāḥ pṛṣṭhataḥ pṛṣṭhataḥ samanubaddhā

28）Ms. iha sya.
29）Ms. jīvatukāmo.
30）Ms. puruṣaś.
31）Ms. nigacchen.
32）Ms. puruṣaḥ.
33）Ms. puruṣaḥ.

(67r3) iha te 'nte vadhiṣyāma iha te 'nte vadhiṣyāmaḥ | yat te bhoḥ puruṣa kṛtyaṃ vā karaṇīyaṃ vā tat kuruṣva |

そこで、一つの籠に入れられた勢力絶大で激しい毒のある四匹の毒蛇を恐れた（bhīta）その男がどこかへ逃げ去るとしよう。〔すると〕ある者がその男にこのように言うとしよう。「おい、男よ、剣（asi）を振り上げた五人の殺し屋たちが『今や俺たちがお前を殺してやろう。今や俺たちがお前を殺してやろう。』と、後からお前を追ってくるぞ。おい、男よ、お前はなすべきことあるいは務めを果たせ。」

[3] atha sa puruṣo bhītaś caturṇām āśīviṣāṇām ugratejasām ghoraviṣāṇām ekakaraṇḍakaprakṣiptānāṃ bhīta«ḥ» pañcānām utkṣiptāsikānāṃ vadhakapuruṣāṇām yena vā tena vā niṣpālāyeta | taṃ kaścid evaṃ vadet | ayaṃ te bhoḥ (67r4) puruṣa ṣaṣṭho 'ntaścarako[34] vadhakapuruṣaḥ pṛṣṭhataḥ pṛṣṭhataḥ samanubaddha iha te 'nta utkṛttamūlaṃ[35] śiraḥ kṛtvā pṛthvyāṃ nipātayiṣyāmi | iha te 'nta utkṛttamūlaṃ[36] śiraḥ krtvā pṛthivyāṃ nipātayiṣyāmi | yat te bhoḥ puruṣa kṛtyaṃ karaṇīyaṃ vā tat kuruṣva |

そこで、一つの籠に入れられた勢力絶大で激しい毒のある四匹の毒蛇を恐れ、剣を振り上げた五人の殺し屋たちを恐れたその男がどこかへ逃げ去るとしよう。〔すると〕ある者がその男にこのように言うとしよう。「おい、男よ、顔見知り（antaścaraka）で六番目の殺し屋が『今や俺がお前の首を切って頭を地面に落としてやろう。今や俺がお前の首を切って頭を地面に落としてやろう』と、後からお前を追ってくるぞ。おい、男よ、お前はなすべきことあるいは務めを果たせ。」

[4] atha sa puruṣo bhītaś caturṇām āśīviṣāṇām ugratejasāṃ (67r5) ghoraviṣāṇām ekakaraṇḍakaprakṣiptānāṃ bhītaḥ pañcānām utkṣiptāsikānāṃ vadhakapuruṣāṇāṃ bhītaḥ ṣaṣṭhād antaścarakād vadhakapuruṣād yena vā tena vā niṣpālāyeta | sa tatra paśyec chūnyaṃ grāmam | sa tatra praviśet | sa tatra yad yad evāgāraṃ vyavalokayec chūnyakam eva vyavalokayet | riktakam eva tucchakam evāsā(67v1)rakam eva vyavalokayet | yad yad eva bhājanaṃ parāmṛṣet | riktakam eva parāmṛṣet | tucchakam evāsārakam eva parāmṛṣet | taṃ kaścid evaṃ vadet | asmin bhoḥ puruṣa śūnyagrāme caurā āgamiṣyanti grāmaghātakāḥ | mā te tvā sarveṇa sarvaṃ jīvitād vyaparopayiṣyanti | yat te bhoḥ puruṣa kṛtyaṃ vā karaṇīyaṃ vā tat kuruṣva |

34）Ms. ntaḥko

35）Ms. iha te 'nte utkṛtyamūlaṃ.

36）Ms. iha te 'nte utkṛṣṭamūlaṃ.

そこで、一つの籠に入れられた勢力絶大で激しい毒のある四匹の毒蛇を恐れ、剣を振り上げた五人の殺し屋たちを恐れ、顔見知りの六番目の殺し屋を恐れたその男がどこかへ逃げ去るとしよう。そこで、その人が空っぽの（śūnya）村（grāma）を見て、そこに入るとしよう。そこで、その人がそれぞれの家を見るとしよう。空っぽになっている〔それぞれの家を〕見るとしよう。空虚で（riktaka）虚しく（tucchaka）中身がない（asāraka）〔それぞれの家を〕見るとしよう。それぞれの〔家の〕什器（bhājana）に触れるとしよう。空虚で虚しく中身がない〔それぞれの什器に〕触れるとしよう。〔すると〕ある者がその男にこのように言うとしよう。「おお、男よ、この空っぽの村に村を破壊する盗賊（caura）たちがやって来るぞ。奴らが決してお前の命を奪わないように、おい、男よ、お前はなすべきことあるいは務めを果たせ。」

[5] atha sa (67v2) puruṣo bhītaś caturṇām āśīviṣāṇām ugratejasāṃ ghoraviṣāṇām ekakaraṇḍakaprakṣiptānāṃ bhītaḥ pañcānām utkṣiptāsikānāṃ vadhakapuruṣāṇāṃ bhītaḥ ṣaṣṭhād antaścarakād vadhakapuruṣād bhītaḥ śūnyagrāme caurakāṇāṃ grāmaghātakānāṃ yena vā tena vā niṣpālāyeta । sa tatra paśyed oghaṃ mahaughaṃ nadīṃ ca pārvatīyāṃ (67v3) gambhīrāṃ śīghraśrotasam dūraṅgamāṃ hāryahāriṇīm । apārimañ cāsyās tīraṃ sāśaṅkasaṃmataṃ sabhayasaṃmataṃ sapratibhayabhairavasaṃmataṃ pārimañ cāsyās tīraṃ kṣemaṃ śivaṃ sauvastikaṃ svastyayanam । na cātrāsti naur vā kolo vā tiryak pāraṃsantaraṇāya । nāpy uttare setuḥ pārāt pāraṃgamanāya ।

tasyaivaṃ syād । ayaṃ khalv e(67v4)ṣa mahaugho nadī ca pārvatīyā gambhīrā śīghraśrotā dūraṃgamā hāryahāriṇī । apārimañ cāsyās tīraṃ sāśaṅkasaṃmataṃ sabhayasaṃmataṃ sapratibhayabhairavasaṃmataṃ pārimañ cāsyās tīraṃ kṣemaṃ śivaṃ sauvastikaṃ svastyayanaṃ vā । na cātrāsti naur vā kolo vā tiryak pāraṃsantaraṇāya । nāpy uttare setur apārā(67v5)t[37] pāraṃgamanāya । yac cāhaṃ prabhūtaṃ tṛṇakāṣṭhaśākhāparṇaśadam[38] aikadhye[39] 'bhisaṃkṣipya kolam badhnīyām । kolaṃ baddhvā[40] kolaṃ niśritya kolaṃ pratiṣṭhāya hastābhyāṃ pādābhyāṃ pratisroto

37）パーリ語経典では、apārā pāraṃgamanāya が一般的。数行上の同じ文では古典梵語に標準的な pārāt が使われていて、綴りが統一されていないことに注意。

38）Ms. -daśam.

39）通常は aikadhyam であるが、Buddhist Hybrid Sanskrit の ekadhya は処格でも用いられるので、敢えて訂正しない。なお、'bhisaṃkṣipya のアヴァグラハは校訂者が補った。また、数行下では両者が混同されて aikadhyem と書かれていることに注意（こちらは aikadhyamに訂正）。綴りが不統一な点については、本稿注37も参照のこと。

40）Ms. badhvā.

vyāyaccheya | sa idaṃ pratisaṃkhyāya prabhūtaṃ tṛṇakāṣṭhaśākhāparṇaśadam[41] aikadhyam[42] abhisaṃkṣipya kolam badhnīyāt | kolaṃ baddhvā[43] kolaṃ (68r1) niśritya[44] kolaṃ pratiṣṭhāya hastābhyāṃ pādābhyāṃ pratisroto vyāyacchate |

そこで、一つの籠に入れられた勢力絶大で激しい毒のある四匹の毒蛇を恐れ、剣を振り上げた五人の殺し屋たちを恐れ、顔見知りの六番目の殺し屋を恐れ、空っぽの村で村を破壊する盗賊たちを恐れたその男がどこかへ逃げ去るとしよう。そこで、その人が、巨大な激流と、山から流れ出た深くて急流で遠くに向い、奪われるべき物を〔何でも〕奪ってゆく川を見るとしよう。また、危険な物が認められ、恐しい物が認められ、恐ろしくて怖い物が認められるその〔川の〕こちらの岸と、安穏で幸福で幸運で幸運を成就したその〔川の〕向こうの岸を〔見るとしよう〕。しかし、そこには、〔川を〕横切って岸に渡る船（nau）もなく筏（kola）もなく、また、岸から岸に行くための渡る橋（setu）もない。

その人はこのように考えるとしよう。「まさにこれは巨大な激流であり、山から流れ出た深くて急流で遠くに向い、奪われるべき物を〔何でも〕奪ってゆく川である。また、この〔川の〕こちらの岸は危険な物が認められ、恐しい物が認められ、恐ろしくて怖い物が認められ、この〔川の〕向こうの岸は安穏で幸福で幸運で幸運を成就している。しかし、ここには、〔川を〕横切って岸に渡る船もなく筏もなく、また、岸から岸に行くための渡る橋もない。私は多くの草（tṛṇa）や木切れ（kāṣṭha）や枝（śākhā）や落葉（parṇaśada）をひとつにまとめて筏（kola）を組もう。筏を組んだら、筏に頼って、筏を拠り所にして、両手両足で流れに逆らって進もう。」その人はこのように考えて、多くの草や木切れや枝や落葉をひとつにまとめて筏を組むであろう。筏を組んだら、筏に頼って、筏を拠り所にして、両手両足で流れに逆らって〔進むべく〕努めるのである。

41）Ms. -daśam.
42）Ms. aikadhyem.
43）Ms. badhvā.
44）Ms. niḥśritya.

[6] tathā tathāsyāpahīyate karaṇḍaḥ | apahīyante catvāra āśīviṣā ugratejaso ghoraviṣā ekakaraṇḍe prakṣiptāḥ | apahīyante pañcotkṣiptāsikā vadhakapuruṣāḥ | apahīyate ṣaṣṭho 'ntaścarako vadhakapuruṣaḥ | apahīyate śūnyagrāmaḥ | apahī(68r2)yante caurāḥ grāmaghātakāḥ | apahīyanta ogho mahaugho nadī ca pārvatīyā gambhīrā śīghraśrotā dūraṃgamā hāryahāriṇī | dūre cāsya bhavaty apārimaṃ tīraṃ sāśaṅkasaṃmataṃ sabhayasaṃmataṃ sapratibhayabhairavasaṃmatam | antike cāsya bhavati pārimaṃ tīraṃ kṣemaṃ śivaṃ sauvastikaṃ svastyayanam | sa tīrṇaḥ pāragaḥ sthale ti(68r3)ṣṭhati brāhmaṇaḥ |

まさにこのようにして、その人にとっては、籠が捨てられ、一つの籠に入れられた勢力絶大で激しい毒のある四匹の毒蛇が捨てられ、剣を振り上げた五人の殺し屋たちが捨てられ、顔見知りの六番目の殺し屋が捨てられ、空っぽの村が捨てられ、村を破壊する盗賊たちが捨てられ、巨大な激流と、山から流れ出た深くて急流で遠くに向い奪われるべき物を〔何でも〕奪ってゆく川が捨てられる。そして、その人は、危険な物が認められ、恐しい物が認められ、恐ろしくて怖い物が認められるその〔川の〕こちらの岸から遠ざかり、安穏で幸福で幸運で幸運を成就しているその〔川の〕向こうの岸に近づく。向こう岸に向かうその婆羅門（brāhmaṇa）[45] は渡り終わって地面に立つのである。

[7][46] iti hi bhikṣava upameyaṃ kṛtā yāvad evārthasya vijñaptaye | ayañ ca punar atrārtho draṣṭavyaḥ |

karaṇḍaka iti hi bhikṣavo 'syaitat kāyasyādhivacanam | rūpiṇa audārikasya cāturmahābhautikasya mātāpitraśucikalalasaṃbhūtasyaudanakulmāṣopacitasya nityocchadanasnapanaparimardanavikaraṇa(68r4)vidhvansanadharmiṇa etad adhivacanam | **catvāra āśīviṣā** iti caturṇāṃ dhātūnām etad adhivacanam | tadyathā pṛthivīdhātor abdhātos tejodhātor vāyudhātoḥ | pṛthivīdhātau bhikṣavaḥ prakupite <maranaṃ vā nigacchen> maraṇamātrakaṃ vā duḥkham abdhātau tejodhātau vāyudhātau bhikṣavo prakupite maranaṃ vā nigacchen maraṇamātrakaṃ vā duḥ(68r5)kham | **pañcotkṣiptāsikā vadhakapuruṣā** iti pañcānām upādānaskandhānām etad adhivacanam | tadyathā rūpopādānaskandhasya vedanāsaṃjñāsaṃskāravijñānopādānaskandhasya | **ṣaṣṭho 'ntaścarako vadhakapuruṣa** iti nandīrāgasyaitad adhivacanam |

śūnyagrāma iti ṣaṇṇām adhyātmikānām āyatanānām etad adhivacanam |

45）ここに婆羅門の語が唐突に現れるが、この語を含む一文は一種の定型句であり、同様の文章は経典の処々に見られる。八尾史2013：101注4に詳しい。『毒蛇経』は定型句をそのまま用いただけであろう。吉本信行1997, 同2002も参照。

46）この節では adhivacana の対象となる比喩中の語をボールド体で示す。

tadyathā cakṣu(68v1)ṣa ādhyātmikasyāyatanasya śrotrasya ghrāṇasya jihvāyāḥ kāyasya manaso 'dhyātmikasyāyatanasya | cakṣur bhikṣavaḥ kulaputro vyavalokayati | śūnyakam eva vyavalokayati | riktakam[47] eva vyavalokayati | tucchakam evāsārakam eva vyavalokayati | śrotraṃ ghrāṇaṃ jihvāṃ kāyaṃ mano bhikṣavaḥ parāmṛṣati | śūnyakam eva (68v2) parāmṛṣati | riktakam[48] eva tucchakam evāsārakam eva parāmṛṣati | **caurā grāmaghātakā** iti ṣaṇṇāṃ bāhyānām āyatanānām etad adhivacanam | cakṣur bhikṣavo hanyate manāpāmanāpai rūpaiḥ śrotraṃ śabdaiḥ ghrāṇaṃ gandhair jihvā rasaiḥ kāyaḥ sprasṭavyair mano bhikṣavo hanyate manāpāmanāpair dharmaiḥ | **caurā grāmaghātakā** iti ṣaṇṇāṃ bāhyānām āyatanānām etad adhivacanam | cakṣur bhikṣavo hanyate manāpāmanāpai rūpaiḥ śrotraṃ śabdaiḥ ghrāṇaṃ gandhair jihvā rasaiḥ kāyaḥ sprasṭavyair mano bhikṣavo hanyate manāpāmanāpair dharmaiḥ |

ogho mahaugha i(68v3)ti bhikṣavaś caturṇām oghānām etad adhivacanam | tadyathā kāmaughasya bhavaughasya dṛṣṭyoghasyāvidyaughasya[49] | **nadīti** bhikṣavaḥ tisṛṇāṃ tṛṣṇānām etad adhivacanam | tadyathā kāmatṛṣṇā«yā» rūpatṛṣṇāyā ārūpyatṛṣṇāyāḥ | **apārimaṃ tīraṃ sāśaṅkasaṃmataṃ sabhayasaṃmataṃ <sa>pratibhayabhairavasaṃmatam** iti satkāyasyaita(68v4)d adhivacanam | **pārimaṃ tīraṃ kṣemaṃ śivaṃ sauvastikaṃ svastyayanam** iti sopadhiśeṣasya nirvāṇadhātor etad adhivacanam | **kola** iti bhikṣava āryāṣṭāṅgasya mārgasyaitad adhivacanam | **hastābhyāṃ pādābhyāṃ pratisroto vyāyāma** iti vīryārambhasyaitad adhivacanam | **sa tīrṇaḥ pāraṅgataḥ sthale tiṣṭhati brāhma**(68v5)**ṇa** iti tathāgatasyārhataḥ samyaksaṃbuddhasyaitad adhivacanam |

実に、比丘たちよ、このような比喩が作られたが、〔次に述べる〕限りの意味を知らせるためである。ここでは次のような意味が理解されるべきである。

①「籠」とは、比丘たちよ、それはこの身体（kāya）の言い換え（adhivacana）である。有色で、粗大で、四大種よりなり、母と父の不浄（aśuci）・カララ（kalala）から生まれ[50]、飯と粥によって養われ、常に塗油（ucchadana）沐浴（snapana）按摩（parimardana）破壊（vikaraṇa）分解（vidhvansana）の性質のある〔身体〕の言い換えである。②「四匹の毒蛇」とは、それは四つの界（dhātu）の言い換えである。すなわち、地界と水界と火界と風界の〔言い換え〕である。比丘たちよ、地界が怒り出す時には、人は死あるいは死に等しい苦痛に到るであろ

47）Ms. ṛktakam.
48）Ms. ṛktakam.
49）Ms. -vidyoghasya.
50）このフレーズ「母と父の不浄なるカララから生まれ（mātāpitraśucikalalasaṃbhūtasya）」が『倶舎論』に引用されることから、シャマタデーヴァの注釈書が『毒蛇経』を全文引用する。本稿注8参照。

う。比丘たちよ、水界と火界と風界が怒り出す時には、死あるいは死に等しい苦痛に到るであろう。③「剣を振り上げた五人の殺し屋」とは、それは五取蘊の言い換えである。すなわち、色取蘊、受・想・行・識取蘊の〔言い換え〕である。④「顔見知りの六番目の殺し屋」とは、それは喜貪（nandīrāga）の言い換えである。

⑤「空っぽの村」とは、それは六内処の言い換えである。すなわち、眼内処、耳・鼻・舌・身・意内処の〔言い換え〕である。比丘たちよ、善男子は眼を見る。〔眼を〕空っぽであると見る。虚しいものであると見る。空虚である、中身がないと見る。比丘たちよ、耳・鼻・舌・身・意を把握する。空っぽであると把握する。虚しいものである、空虚である、中身がないと把握する。⑥「村を破壊する盗賊」とは、それは六外処の言い換えである。比丘たちよ、眼は可愛・不可愛なる色によって破壊される。比丘たちよ、耳は可愛・不可愛なる声によって、鼻は香によって、舌は味によって、身は所触によって、意は法によって破壊される。

⑦「巨大な激流」とは、比丘たちよ、それは四暴流の言い換えである。すなわち、欲暴流と有暴流と見暴流と無明暴流の〔言い換え〕である。⑧「川」とは、それは三つの愛の言い換えである。すなわち、欲愛と色愛と無色愛の〔言い換え〕である。⑨「危険な物が認められ、恐しい物が認められ、恐ろしく怖い物が認められるこちらの岸」とは、それは有身〔見〕の言い換えである。⑩「安穏で幸福で幸運で幸運を成就している向こうの岸」とは、それは有余依涅槃界の言い換えである[51)]。⑪「筏」とは、比丘たちよ、それは八正道の言い換えである。⑫「両手両足で流れに逆らって〔進むべく〕努めること」とは、それは精進開始の言い換えである[52)]。⑬「向こう岸に向かうその婆羅門は渡り終わって地面に立つ」とは、それは如来・阿羅漢・正等覚の言い換えである。

51）「有余依涅槃」の語については後述（注74）。漢訳『雑阿含』1172では「無余涅槃」である。
52）⑪⑫の項については経典第6節には提示されない。そのためか、⑫については、経典第5節末尾の vyāyacchate を名詞 vyāyāmaに変えて提示している。

[8] iti hi bhikṣavo yat tac chāstrā śrāvakāṇāṃ karaṇīyam anukampakena kāruṇikenārthakāmena hitaiṣiṇā karuṇāyamānena kṛtaṃ vas tan mayā | yuṣmābhir idānīṃ karaṇīyam | etāni bhikṣavo 'raṇyāni vṛkṣamūlāni śūnyāgārāṇi parvatakandara-giriguhāpa(69r1)lālapuñjābhyavakāśaśmaśānavanaprasthāni prāntāni śayanāsanāni dhyāyata bhikṣavo mā pramādyata mā paścād vipratisāriṇo bhūta | idam asmākam anuśāsanam | idam avocat |

実に、比丘たちよ、憐愍心を持ち（anukampaka）同情心を持ち（kāruṇika）義利を願い（arthakāma）利益を求め（hitaiṣin）慈悲を行う（karuṇāyamāna）師（śāstṛ）が声聞たちに為すべきこと（karaṇīya）を、私はあなた方に為し終わった。今やあなた方も為すべきである。比丘たちよ、阿蘭若（araṇya）木の根元（vṛkṣamūla）空屋（śūnyāgāra）山（parvata）峡谷（kandara）岩山（giri）洞窟（guhā）草庵（palālapuñja）空地（abhyavakāśa）死体捨て場（śmaśāna）森の台地（vanaprastha）といった、これらの辺地（prānta）を住居として禅定せよ。比丘たちよ、放逸になるな。後で後悔するな。これが私の教えである[53]。この〔経〕を説き終わった。

第３ダンダ

grāma«ḥ» śūnyo bhavati janapūrṇo 'pi <bhūtvā>[54]
bhūtvā śūnyaḥ prativasati bhūyaḥ krameṇa |
sarvāvasthaṃ viṣayasamavāyas tu śūnyo
nābhūtātmā bhavati hi na bhūtvā vyapai(69r2)ti ‖ 1 ‖

〔元は〕人々で満ちて存在していたのに、村（grāma）は〔今は〕空っぽ（śūnya）となっている。空っぽとなってからも〔村は〕前と同じように存続している。一方、対境の集り（viṣayasamavāya）は〔三時の〕分位（avasthā）すべてにわたって空なるもの（śūnya）〔として存続するが、〕実に〔元から〕無であったアートマン（abhūtātman）は〔今も〕存在せず、存在し終わって〔過去に〕去って行くこともない。

53）第8節の最初からここまでの文章は経典を結ぶ定型句であり、処々に見られる。最後の一文の「私の」の語は梵文では複数形で書かれているがブッダを意味する。『毒蛇経』に続く第27三啓経の『灰河経（*Kṣāranadī*）』の結部もこの第8節と全同である（Ms. 71v5-72r1）。

54）写本では、a句は yathā grāma śūnyo bhavati janapūrṇṇo pi と書かれているが、Śarabhā 調の韻律に合致せず、内容的にも理解不能であるため、このように修正した。

[jñānaṃ smārtaṃ] karma vā vedanā vā
dṛṣṭvā sarvaṃ pratyayebhyaḥ pravṛttam |
naivātmānaṃ prekṣate nātmanīnaṃ
yogācāro riktakeṣv indriyeṣu ‖ 2 ‖

認識作用（jñāna）や記憶作用（smārta-karman）あるいは感受作用（vedanā）が〔あるが〕、すべては原因（pratyaya）によって生じたものであると見て、瑜伽行者（yogācāra）は空虚な（riktaka）根（indriya）の上に、決してアートマン（我）を見ず、我が物（ātmīna 我所）を見ない。

yaḥ paśyati spṛśati jighrati yaḥ śṛṇoti
yasya smṛtiś ca matir eva ca vedanā ca |
ātmā sa[55] ity upadiśanti na darśayanti
śayyāsanādibhir ivoparataṃ bhadantam ‖ 3 ‖

「見るもの、触れるもの、嗅ぐもの、聞くものであり、記憶作用（smṛti）と認識作用（mati）と感受作用（vedanā）を有するもの、それがアートマンである。」と人々が言っても〔それを〕証明することはできない。例えば、座臥具等〔のあること〕によって休息してる大徳が〔そこにいることを証明できない〕ように。

anviṣya nopalabhate nagaraṃ (69r3) yathaiva
prāsādakuḍyabhavaneṣu na kiñcid anyat |
ātmānam evam upacāragataṃ vicintya
buddhīndriyādiṣu na paśyati kiñcid anyat ‖ 4 ‖

例えば、探しても町（nagara）〔という実体〕を認識せず、高楼（prāsāda）や塁壁（kuḍya）や住居（bhavana）の上に〔町という〕如何なる別物も〔認識〕しないように、同様に、アートマンは仮説（upacāra）に属するものだと判断して、〔瑜伽行者は〕識（buddhi）と根（indriya）の上に〔アートマンという〕如何なる別物も見ない。

nānya«d ya»thāsti nagarañ ca gṛ[hā]dikebhyo
bahvāśrayan[56] nagaram asti samājñayā ca |

55）Ms. ca.
56）書写生による bahvāśrayān の誤記の可能性もある。その場合の翻訳は「多くの物を依りどころとするから」となる。

anyas tathā na puruṣo 'sti matīndriyebhyaḥ
karmāśrayāc ca puruṣo vyavahārato 'sti ‖ 5 ‖

例えば、家（gṛha）などとは別に町（nagara）〔という実体〕は存在しない。多くの物を依りどころとする町（nagara）は名称（samājñā）として存在する〔だけである〕。同様に、〔六〕識（mati）と〔六〕根（indriya）とは別に人（puruṣa）〔という実体〕は存在しない。〔多くの〕作用（karman）を依りどころとするから、人（puruṣa）は言語表現（vyavahāra）として存在する〔だけである〕。

yathā cakreṣādau[57] bhavati rathasaṃ(69r4)jñā [kṛtavidhau]
tathā '– – .ādau bhavati samavāye nara iti |
sati hy ātmagrāhe vitatharacite pratyayaśatair
ahaṃkāragrastaṃ mamatavatayā muhyati jagat ‖ 6 ‖

例えば、組み立てられた（kṛtavidhi）車輪（cakra）や轅（īṣā）等に対して「乗り物（ratha）」という名称（saṃjñā）が存在する如く、‥‥等[58]の集り（samavāya）に対して「人（nara）」という〔名称〕が存在する。実に、百の原因（pratyaya）によって不実に作られた我執（ātmagrāha）がある限り、我見（ahaṃkāra）に呑まれた世間は「我が物である、汝の物である」という思い（mamatavatā）によって彷徨う。

durjñeyā durvineyā duravajayabalā durgādhagatayo
bhettāraḥ satpathānāṃ dhṛtimatiripavo vṛttakṣayakarāḥ |
rāgoddāmendriyāṇām avihatatamasā(69r5)m udbhrāntamanasāṃ
bhūtānāṃ dravyabhūtaṃ kuśalam akuśalā muṣṇanti viṣayāḥ ‖ 7 ‖[59]

知り難く、調伏し難く、征服し難い軍勢を持ち、渡り難い行程（gati）を持ち、正しい道の分断者であり、堅固さ（dhṛti）と慧（mati）の敵であり、戒（vṛtta）の破壊者である不善なる対境（viṣaya）は、貪（rāga）に満ちた（uddāma）根

57）Ms. cakreṣvādau.

58）例えば『十二門論』「觀相門第四」（大正30巻, 162c8-9）の記述「如車以輪軸轅軛。是爲車相。如人以頭目腹脊肩臂手足。是爲人相」、あるいは *Milindapañhā*, Trenckner 1880：26-27を参照すると、身体を構成する単語が二つ書かれていると思われるが、写真の状態が悪く、tathā 'smiṃś cittādau とも読みうるように見えるが、現時点では確定できない。

59）この偈はヴァスバンドゥの『釈軌論』にクレジットなしで引用されるが（P. ed. Si 152b7-, D. ed. Shi 131b-）、詳細については上野牧生・松田和信2021参照。

（indriya）を持ち、迷妄（tamas）を断じておらず、迷乱の意（manas）もてる有情（bhūta）たちの財産の如き善を奪う。

caurāḥ svalpaguṇaṃ haranti vibhavaṃ rājāparādhān nṛṇāṃ
nopakrośabhayaṃ na durgatibhayaṃ yasmin hṛte prāpyate |
śīlādyaṃ hriyate[60] dhanaṃ tu viṣayair ātmāparādhān nṛṇāṃ
tīvraṃ duḥkham amutra ceha ca narair yasmin[61] hṛte prāpyate || 8 ||

王〔法〕に対する罪を犯すこと（rājāparādha）から、盗賊（caura）たちは、それが奪われても、叱責（upakrośa）の恐怖や悪趣〔に行く〕恐怖が得られることのないような、人々のわずかな価値しかない（svalpaguṇa）財産（vibhava）を奪ってゆく。一方、自分に対する罪を犯すこと（ātmāparādha）から、それが奪われたら、来世でも（amutra）今生でも（iha）鋭い苦しみが得られるような、人々の戒などの財産（dhana）が対境（viṣaya）によって奪われてゆく。

ブッダの教えを讃える定型偈[62]

yāvad bhinnendranīla(69v1)prakhacitam iva khaṃ nīlavastraprakāśaṃ
yāvan nirdhāntahemadyutinibhakiraṇo bhāskaraḥ khe vibhāti |
yāvan nakṣatramālī gaganam anusaran gāṃ śaśī yāti pādais
tāvan maunīndram etat tribhuvanasahitaṃ śāsanaṃ jājvalītu || 9 ||[63]

砕かれたサファイア（indranīla）を散りばめたような天空（kha）が青い衣（nīlavastra）のように輝いている限り、精錬された（nirdhānta）黄金の輝き（hemadyuti）に似た光線（kiraṇa）を放つ日輪（bhāskara）が天空で輝いている限り、星宿の集まり（nakṣatramālā）をひき連れた月輪（śaśin）が日輪（go）を追いつつ、

60）Ms. hṛdaye.
61）Ms. asmin*.
62）それぞれの三啓経の第3ダンダ末にはブッダの教えを讃える共通の偈が複数置かれる。これを定型偈と呼ぶが、定型偈は全体で8種認められる。各三啓経にはこの8種の中から任意に数個の定型偈が置かれている。第26三啓経では2種の定型偈が認められる。松田2019：3参照。
63）他の定型偈は各三啓経ですべて同じであるが、yāvat … tāvat …の構文の定型偈は各三啓経で様々なヴァリエーションで現れる。例外的に、第26三啓経のこの定型偈と同文の偈が第7三啓経にも用いられている。d句の tribhuvanasahitaṃ は第7三啓経では tribhavahitakaram* (14v3) と書かれているが意味は同じである（cf. Schmidt 1928, s.v. sahita）。さらに、a句の bhinnendranīlaprakhacitam は第7三啓経では bhinnendranīlaṃ prakhacitam と書かれているがこちらの方が正しい。

光（pāda）とともに天空（gagana）を進んでゆく限り、三有の者たちに有益な牟尼の最上者のその教え（śāsana）が大いに輝かんことを。

yānīha bhūtānīti ‖ 10 ‖[64)]

yānīha bhūtāni samāgatāni sthitāni bhūmāv atha vāntarīkṣe |
kurvantu maitrīṃ satataṃ prajāsu divā ca rātrau ca carantu dharmam ‖

地上に住む者であれ、空中に住む者であれ、ここに集まった有情たちは常に生類に慈しみをなせ。昼も夜も〔ブッダの〕教え（dharma）を行ずべし。

3 第26三啓経の成立とアシュヴァゴーシャの根拠

第26三啓経に用いられた偈は、第1ダンダで18偈、第2ダンダで10偈の計28偈である。三啓経の基本構造から判断して、28偈のうち、アシュヴァゴーシャ作品から取られたと推定される偈は、第1ダンダ §1.2 の12偈、および第3ダンダ §3.1 の8偈の計20偈である。冒頭の帰敬偈6偈と末尾のブッダの教えを讃える定型偈2偈は、雑阿含1172経の『毒蛇経』を用いて三啓経が編纂された際に新たに作られたものであろう。その編纂者がアシュヴァゴーシャ自身であったかどうかは現時点では判断できない。その可能性はゼロではないかもしれないが、恐らくそれより後代に編纂されたとみなすのが穏当であろう。では仮にアシュヴァゴーシャではないとすれば、上限はどこまで遡るのか。漢訳に残る次のような『三法度論』の帰敬偈がひとつの判断を与えてくれるかもしれない（大正1506, 25巻, 15c7-10）。

知生苦無量　善寂趣彼安　用悲衆生故　輪轉於多劫
捨己之妙善　爲一切説法　普智滅諸趣　稽首禮最覺

この帰敬偈は、第26三啓経の帰敬第1偈と同じ偈を2偈形式で漢訳したものに

64）この定型偈は40種の三啓経のほとんどで用いられているため、ここでは冒頭の語を示して後は省略されている。他の三啓経から取って全文を示した。さらに、これと同じ偈は *Divyāvadāna*（Cowell and Neil 1886：340.5-7, 平岡聡2007：14, *Mahāsūtra*（Skilling 1994：615）など、他にも多く見られる。

他ならない。この漢訳と第1ダンダ第1偈の梵文を比較すれば、『三法度論』は本稿で提示した梵文を正確に漢訳していると言える。『三法度論』は僧伽提婆（Saṅghadeva）によって西暦391年に翻訳された犢子部（Vātsīputrīya）あるいは犢子部系の教団に属する文献とされ、382年に訳された異訳の『四阿含暮抄解』（大正1505）もあるが、それにはこの帰敬偈は存在しない。なお、『三法度論』は山賢（Vasubhadra）作のスートラに僧伽先（Saṅghasena）の注解を併せたテキストであるが、この帰敬偈はスートラ部にあった帰敬偈であるとみなされている[65]。なぜ、第26三啓経と同じ帰敬偈が『三法度論』の帰敬偈に使われているのか、その事情は不明であるが、この偈が西暦391年より前のインドに遡ることは間違いない。つまり、第26三啓経の編纂者が2世紀のアシュヴァゴーシャではなかったとしても、その編纂年代が4世紀後半より前であった可能性は高い。書体から判断して、『三啓集』写本の作成はアティシャと同時代の11世紀に下るが、その中に含まれる三啓経の成立は遙か古い時代に遡るのである。

では、アシュヴァゴーシャ作品偈とみなせる §1.2 および §3.1 の計20偈はどの作品から借用されて第26三啓経に組み込まれたのであろうか。これらの偈は『ブッダチャリタ』や『サウンダラナンダ』の偈ではない。ただ、様々な韻律を駆使して著されている点に、古くはリューデルスの研究が推定したように「カーヴィヤ調の韻文で綴られた阿含経典解釈論」とされる[66]、すでに失われた『荘厳経論（*Sūtrālaṃkāra*）』の片鱗が見て取れるようにも思われるが、より確実な根拠を1点示したい。

ドイツ探検隊の収集した梵文トルファン写本コレクションの中に、写本カタログで SHT 378 の整理番号が付けられた、韻文を書写した同一写本に属する3葉（abc の3葉）の断簡がある[67]。この中の1葉（SHT 378b）については、第17

65）『三法度論』の伝来と内容構成については北海道大学の林寺正俊氏より多くの教示を得た。御礼申し上げる。林寺正俊2015, 同2018参照。

66）『荘厳経論』に関わる従来の研究については上野牧生2015参照。

67）SHT Calalogue, Teil. I (1965)：169-170では、Kāvya-Anthologieという仮題が与えられ、378a のローマ字転写が掲載されている。さらに、Calalogue, Teil. IV (1980)：310-314 には、ローレ・ザンダー（Lore Sander）による3葉すべてのローマ字転写が掲載されている。

三啓経の第1ダンダと同じ偈が書かれていることにイエンス=ウヴェ・ハルトマンが気づいたが、他文献における引用によって、それらの偈が元は『荘厳経論』に含まれる偈であったことは確実である[68]。さらに、ハルトマンの発見を受けて3葉を読んだ共著者の松田は、別の1葉（SHT 378a）に、本稿で紹介している第26三啓経第1ダンダの第7偈から第14偈までが書かれていることを見い出した。先に述べたように『三啓集』の写本には偈番号は書かれていないが、SHT 378a には偈番号が偈のグループ毎に数字で書かれている。三啓経の偈との対応を示せば以下の通りである[69]。

四界を説くグループ偈

第1ダンダ第7偈　＝　SHT　378a 第1偈
第1ダンダ第8偈　＝　SHT　378a 第2偈
第1ダンダ第9偈　＝　SHT　378a 第(3)偈
第1ダンダ第10偈　＝　SHT　378a 第(4)偈
第1ダンダ第11偈　＝　SHT　378a 第5偈

五取蘊を説くグループ偈

第1ダンダ第12偈　＝　SHT　378a 第1偈
第1ダンダ第13偈　＝　SHT　378a 第2偈
第1ダンダ第14偈　＝　SHT　378a 第(3)偈

SHT 378a では、第26三啓経第1ダンダの偈の順番通りに同じ偈が書かれているが、両者は完全に一致する。ただ、一部異なる点もある。SHT 378a では、地水火風の四界を説く5つのグループ偈が終わった後、蘊を説く偈の始まる前に（378a, r2-3）、「五取蘊について、敵からの暴力を比喩をもって説く（paṃcasūpādānaskandheṣv amitrād eva sāhasam（upā）khy（ayā）ha)」と読み取れる散文の見出しが置かれている。なお、蘊を説く偈は SHT 378a のフォリオの後

68）松田和信2021b参照。
69）写本の破れによりすべての数字が読み取れるわけではないが、前後の数字から推定は可能である。

も続いていると思われる。SHT 378 の他の2葉でも、同じグループの偈の前には、単語あるいは文章で見出しが置かれている。このような体裁の韻文文献を書写した写本は、他にもトルファン写本コレクションの中に存する[70)]。

このように、SHT 378 を構成する3葉の中で、SHT 378a には『毒蛇経』第1ダンダと同じ偈が書かれ、さらにもう一葉、SHT 378b には第17三啓経の第1ダンダと同じ偈が書かれている。松田がすでに述べているように[71)]、第17三啓経の偈の一部は他文献においてアシュヴァゴーシャの偈として引用されている。今後刊行される論攷を俟っていただきたいが、SHT 378 の3葉は『荘厳経論』自体を書写した写本断簡である可能性が高い[72)]。従って、第26三啓経の §1.2 に置かれた12偈は、元は『荘厳経論』の偈であったとみなして問題ないであろう。§3.1 の8偈については直接的な証拠はないが、その内容と、末尾の定型偈2偈を含めた計10偈に8種の韻律が使われるというスタイルから判断して『荘厳経論』の可能性は高いように思える[73)]。『荘厳経論』とは、阿含経典を解説する目的で、同じテーマの様々な韻律の偈を並べて、偈のグループ毎に見出しを付けた韻文集であったと言えるのではないか。「カーヴィヤ調の韻文で綴られた阿含経典解釈論」という、失われた『荘厳経論』の真の姿が『三啓集』の解読とトルファン写本によってますます明らかになりつつあることは間違いないであろう。

4 毒蛇経の内容

『毒蛇経』は、経中で説かれる譬喩についてブッダ自身が教義的な語に「言い換え（増語 adhivacana）」を行って解説するという体裁の経典である。このような経典（アディヴァチャナ経典とでも言うべきか）は、初期経典だけでは

70）例えば松田和信2022において『無常経』の偈の項で紹介した SHT 25 がそれである。なお、Mette 2007によって SHT 25 の一部が出版されている。

71）松田和信2021b.

72）SHT 378の3葉については、それがアシュヴァゴーシャの『荘厳経論』であるという視点に立った新たな解読研究が松田とハルトマンの共同論文として出版される。独ライプツィヒ大学のエリ・フランコ教授（Eli Franco）に捧げる記念論集に掲載予定。詳細はそちらに譲る。

73）本稿注59で述べたが、第3ダンダの第7偈はヴァスバンドゥの『釈軌論』に引用されている。この事実も第3ダンダの偈が後代の作偈ではないことを物語っている。

なく大乗経典にも多く存在し、初期経典については、このような教義解釈的スタイルに、後のアビダルマ文献成立へと続く萌芽を読み取ることも可能であろう。『毒蛇経』はこのような「言い換え」の手法を用いて、我々の感官（身体）や対境が苦しみの原因であることを示唆し、その苦しみから逃れる修行（八正道）の開始を勧める。毒蛇の喩えから経典は始まるが、まず、籠に入った四匹の毒蛇の世話を命ぜられた男が、毒蛇を恐れて逃げ出すが、5人の殺し屋、さらに6人目の顔見知りの殺し屋に追われ、空村に逃げ込む。しかし、そこにも村を襲う盗賊がやって来る。村を離れた男は激流の川を渡って向こう岸に逃げようと決意し、筏を組んで努力して此岸を離れ、安全な彼岸に逃げ切ったという話が続く。この比喩物語の言い換えとして、四匹の毒蛇が地水火風の四界、五人の殺し屋が五取蘊、顔見知りの殺し屋が喜貪、空村が六内処、空村を襲う盗賊が六外処、激流と川が四暴流と三愛、筏が八聖道、対岸が有余依涅槃[74]といった具合に，それぞれの喩えがどのような教義的な概念に対応するかが明かされる。このように本経では譬喩とその言い換えを通して、世間の苦しみを知り、修行によって苦しみから逃れることを勧める。

『毒蛇経』という名称は『雑阿含』に含まれる他の経典でも度々言及され[75]、『毒蛇経』にモチーフを得たと思われる、1177経の『灰河経（*Kṣāranadī*）』[76]のよ

74）第26三啓経では対岸が有余依涅槃であると説かれるが（第2ダンダ第7節）、平行経典類では無余〔依〕涅槃と説く方が多数派である。シャマタデーヴァの倶舎論註『ウパーイカー』でも無余依涅槃である。『雑阿含』の各経典を解説する『瑜伽師地論』「摂事分（*Vastusaṃgrahaṇī*）」の該当部分（大正1579, 30巻818b6-27, Tib. D. ed., 226b7-227b1）を見ると、四界、五取蘊、および喜と貪は人々の苦悩を表し、地水火風の四界（四大種）は病という現在の苦悩（*ādīnava）、五取蘊の輪廻という未来の苦悩、喜と貪は現在と未来の老死をもたらすという両世の苦悩であるとされている。さらに、六内処と六外処の十二処は空屋のように空なるものであり、そのような対境を依りどころとする煩悩（煩悩と渇愛）によって様々な損害が生まれる。さらに、煩悩と渇愛が吹き消された境地が有余依涅槃であり、その次の境地が無余依涅槃である。従って、このように理解して修行すれば有余依涅槃に住することができると言う。「摂決択分」では、到達する境地（彼岸）はあくまで有余依涅槃とされている。従って「摂決択分」が依用した『雑阿含』の『毒蛇経』では有余依涅槃の語があったことが推測される。

75）『雑阿含』267（大正2巻, 75b9-10）、同1175（315c29-316a1）では、比喩が身体を示していることを示す際に、『毒蛇経』に詳述する通りであると説く（如篋毒蛇經廣説）。さらに、同282（79a15-17）、同1177『灰河経』（317b14-15）では、その経末において、詳しくは『毒

うな経典も存在する。『灰河経』はパーリ聖典中に平行経が存在せず、恐らく説一切有部教団で独自に編集された経典であったと推定される。このことから、有部教団内では『毒蛇経』が他の経典を産み出すほどの影響力を持った重要経典のひとつであったことが窺える[77]。『毒蛇経』では仏教の修行体系の骨子が述べられるが、その中でも主たるテーマは自己の感官（身体）とそれをとりまく対境（順番に界・蘊・処）について正しく知ることにある[78]。説一切有部教団の修行体系では、存在（法）の三科（蘊・処・界）に通達することが重視されるが、その土壌の元は『毒蛇経』にあった可能性もあろう[79]。

蛇経』に説く通りであるとされて経文が省略されている。第26三啓経の『毒蛇経』に続く第27三啓経が『灰河経』であるが、梵文写本では経文は省略されず、『毒蛇経』と同文が書かれている（本稿注53）。これらのことは、他の経典に先立って『毒蛇経』が存在し、他の経典が『毒蛇経』の影響下に成立したことを物語っているように思われる。

76）『雑阿含』1177の『灰河経』は、漢訳の文面で見る限り「菩薩摩訶薩」の語が『雑阿含』の中で唯一登場し、『大乗荘厳経論』などの大乗論典で修行道の典拠として引用されることから、平川彰1989：245-247、能仁正顕2002：194-195、藤田祥道2005：28-31によって注目されてきた（『灰河経』の研究史は藤田祥道2005に詳しい）。前註に述べたように『灰河経』は三啓集で『毒蛇経』と対になって第27三啓経として収録されているが、Hartmann（Forthcoming）によってアディヴァチャナ部分が公表される。なお、漢訳の「菩薩摩訶薩」の語が三啓集写本では bodhisatva（bodhisattva）とのみ書かれている点は注目される（Ms. 71r4）。詳細は Hartmann（Forthcoming）を俟ちたい。

77）『大智度論』に『毒蛇喩経』のタイトルで本経が引用されることは本稿註7で述べたが、エティエンヌ・ラモートによる『大智度論』のフランス語訳研究における注記では、南伝パーリ語文献の *Mahāvaṃsa* や *Samantapāsādikā* において、Majjhantika なる比丘がカシュミール・ガンダーラ地方へ派遣され、当地で悪龍を調伏して現地の人々に『毒蛇喩経』を説いたことが紹介されている（Lamotte 1949：702ff., fn. 3）。本経の重視が説一切有部にのみ止まるものでないことが窺える。

78）次に述べるアシュヴァゴーシャ作品偈が『毒蛇経』の前半部だけに対して言及する点もそれを裏付けているように思える。

79）修行体系を説く際に、アビダルマ論書で直接『毒蛇経』が言及されることはないが、有部の修行体系が説かれる『達摩多羅禅経』では、四念住の実践に先立って『毒蛇経』の教説が用いられる（大正618, 15巻313b18-23）。觀種如毒蛇　陰爲五怨賊　自覺貪欲患　長夜密侵害　六根如空聚　塵賊競來集　於此内外入　修行眞實觀　見愛如大河　涅槃如彼岸　修行慧眼淨　觀法空無我。この箇所では、①〔身体を構成する四大〕種は毒蛇のようなものであると観察せよ。②〔五〕蘊は五人の敵であると見なせ。③貪欲という患いは夜中に忍び寄って危害を加えてくるものであると自覚せよ。④六根は空っぽの村の如きものであり、⑤外境（塵）という盗賊がやってくる。そのような〔六〕内処と〔六〕外処に対して、

5　アシュヴァゴーシャの毒蛇経解説

第26三啓経の第1ダンダと第3ダンダに置かれた、元は『荘厳経論』の偈であったと推定される20偈は、『毒蛇経』の前半部の内容と順番通りに対応し、アシュヴァゴーシャによる『毒蛇経』解説とも言える。以下にその内容を分析してみたい。

四匹の毒蛇の入った籠　一人の男が四匹の毒蛇の入った籠を受け取り、食事などの世話を命ぜられる[80]。経典末尾の言い換え（adhivacana）では、籠が四大所造の身体であり、四匹の蛇は身体の体調を司る四界であると説明される[81]。人は誰でも自己の身体の世話をしなければならないが、四界の調子が乱れたら病に苦しみ死に到ることになる。これに対応する第1ダンダの偈（7-11偈）では、経典末尾の言い換えをなぞって四界（所喩）と蛇（能喩）を比較し、蛇より四界の方がより悪質であることが説明される。思想的な面では教説と偈に内容的差異は見られず、アシュヴァゴーシャは『毒蛇経』末尾の言い換えを偈で簡潔に解説していると言える。

五人の殺し屋　五人の殺し屋について、経末の言い換えでは五取蘊であると説かれる。しかし、なぜ五取蘊が殺し屋に相当するかは説かれない。一方、第1ダンダの第12偈から16偈では、五取蘊と殺し屋の対比から五取蘊の悪質性が解

修行して正しく観察せよ。⑥〔邪〕見と渇愛は大きな河の如きものであり、⑦涅槃は彼岸の如きものである。修行によって慧根を清らかにして、諸法を空であり無我であると観察せよ、と言う。ここでは、四界が四大種に、喜貪が貪欲に言い換えられているが、四念住に先立つ諸法の把握として『毒蛇経』の教説がそのまま用いられているのである。このように『毒蛇経』の教説は修行に先立って把握されるべき諸法の性質の説明として様々な文献に登場する。また、クマーララータ（Kumāralāta）の『大荘厳論経（*Kalpanāmaṇḍitikā Dṛṣṭāntapaṅkti*）』（大正201, 4巻286b5-9）では、預流に達した女性が正しく見た諸法の内容が『毒蛇経』を用いて説明されている。

80）『増一阿含』の平行経や『大智度論』の引用では、王によって男が蛇の世話を命令される描写が追加されている。本稿注7参照。

81）後代のアビダルマ文献では四界と四大種は同一のものとして規定されるが（例えば『倶舎論偈』I.12ab）、ここでは身体は四大種所造、身体の中の蛇が四界であると明確に区別されている。ここに説かれる四界はインド医学一般で用いられる身体の健康を司る四界と同義であろう。

説される。各偈の要点をまとめると、敵は懐柔することができるが、五取蘊は懐柔することはできない（12-13偈）。五取蘊は自分で自分を死に至らしめる（14偈）。五取蘊が存在すれば外敵によって死に至ることになる。外敵がいなくても五取蘊は自ら死に至ることになる（15偈）。顚倒した者は五蘊が敵であることに気づかない（16偈）。これら5偈によって、五取蘊が死をもたらす避けようのない原因であることを説明する。経文では殺し屋を五取蘊と説明するだけであったが、これらの偈によって、五人の殺し屋の所喩として五取蘊が示された意図が分かり易く解説されていると言える。

六人目の殺し屋　六人目としてやって来る顔見知りの殺し屋は、第1ダンダの17偈では友人の如く善良に見える殺し屋と説かれる。経典の言い換えでは、それを喜貪（nandīrāga）とのみ説くが[82]、喜貪がなぜ六人目の殺し屋であるかは説かれない。一方、17偈と18偈では、殺害者と喜貪を比較して、喜貪の悪質性が勝ることを具体的に説明する。安楽に敏感で外境を享受する喜貪は敵である（17偈）。敵は今世の苦しみを与えるだけであるが、喜貪は今世だけでなく来世の苦しみをもたらす（18偈）。顔見知りの敵として描かれた喜貪は外境の享受という点では世間的には心地よい存在ではあるが、最後には世間の人々を焼いて今生の死と、さらに来世おける死をもたらす原因となると解説される[83]。経典では説かれていない所喩と能喩の関係が17-18偈では分かりやすく解説されているといえる。

空っぽの村　男が逃げ込んだ空っぽの村（śūnya-grāma）は言い換えでは六内処とされ、それらはいずれも空（śūnya）であると説かれる。一方、第3ダンダの第1偈から第6偈では、六根六識からなる人（puruṣa）にはアートマンが存在

82）アビダルマ論書では、一般に nandīrāga は「渇愛と煩悩」と解釈される。つまりこの語は並列複合語と理解される。四諦説などでは、苦しみの原因である集諦は渇愛とされ、さらに渇愛を説明する際には「喜貪を伴う渇愛」と説明される。

83）『瑜伽師地論』「摂事分」の『毒蛇経』解説箇所でも、喜貪は今世と来世の老死の原因であると説明され、アシュヴァゴーシャの解釈と対応する。先於現法成就憙貪以爲所依。能引現法後法老死。名現法後法過患（大正30巻818b11-12）。

しないこと（無我）が説明される。村は対境として三世にわたって実在し、かつて人で満ちていたこともあったが、アートマンは常に存在しない（1偈）。認識や記憶や感受などは原因（pratyaya）より生じたものであり、それらはアートマン（我）や我が物（我所）とは無関係である（2偈）。認識が存在しても、認識作用の主体となるアートマンは存在しない（3偈）。人を構成するものは六根六識のみであり、アートマンは存在しない（4偈）。人（puruṣa）も六根六識に対して与えられた名称に過ぎない（5-6偈）。ここでは、六根六識は実在するが、それらの主体となり支配者となるアートマンは存在せず、アートマンを持つと誤解される「人という存在」も単なる言語表現にすぎないことが明かされる。なお、経典では、空っぽの村（六内処）とそれを襲う盗賊（六外処）という構造、つまり十二処が意図されているが、アシュヴァゴーシャの段階では空っぽの村は六根六識と解釈され、十八界を意図した内容に発展している[84)]。

村を襲う盗賊　空っぽの村にやってくる盗賊たちは、言い換えでは六外処とされ、六根を破壊する存在であると説かれる。一方、第3ダンダの第7偈と第8偈では、対境（viṣaya）は人々の戒（vṛtta）[85)] を破壊する存在であり（7偈）、盗賊に財産が盗まれる程度では来世の苦はやって来ないが、対境によって戒が盗まれるなら来世の苦がもたらされる（8偈）。六境は人々の戒を破壊する存在として描かれる。

以上のように、第26三啓経の第1ダンダと第3ダンダに組み込まれたアシュヴァゴーシャの20偈は、いずれも『毒蛇経』自体では説き明かされていない点を具体的に補いつつ明瞭に説明する内容の偈である。これらの偈はアシュヴァゴーシャによる「毒蛇経解説」というに相応しい。これから判断しても、アシュヴァゴーシャの失われた『荘厳経論』が「カーヴィヤ調の韻文で綴られた阿含経典

84）『瑜伽師地論』「摂事分」の解説では、村の喩えはあくまで十二処（六内処と六外処）と理解しており、アシュヴァゴーシャの解釈とは同じではない。次由善淨無我眞智。如入空室。現觀内外六處皆空（大正30巻818b15-17）。

85）戒を意味する語が第7偈では vṛtta, 第8偈では śīla で表されている。vṛtta が戒を意味することについては、例えば『倶舎論偈』VI.5a 参照。

解釈論」であったことは間違いないであろう。第26三啓経の解読によって失われた『荘厳経論』の片鱗に触れることができたのである。

参考文献

Chung, Jin-il. 2008. *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama*（雑阿含経相当梵文断片一覧）. Tokyo, Sankibo Press.

Cowell, E. B. and R. A. Neil. 1886. *The Divyâvadâna: A Collection of Early Buddhist Legends*. Cambridge: Cambridge University Press (Rep. Amsterdam 1970).

Hartmann, Jens-Uwe. Forthcoming. "The (Re-)Appearance of the “Discourse on the Salt River” (*Kṣāranadī-sūtra*)", in Marek Mejor's Festschrift.

Karashima, Seishi and Wille, Klaus. 2009. *The British Library Sanskrit Fragments. Vol. II.1, Texts*. Tokyo: International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University.

Lamotte, Étienne. 1949 (Rep. 1981). *Le traité de la grande vertu de sagesse de Nāgārjuna (Mahāprajñāpāramitāśāstra)*. Tome II. Louvain-la-Neuve: Université de Louvain, Institut Orientaliste.

Mette, Adelheid. 2007. "Buddhistische Sanskritstrophen aus dem Rotkuppelraum der Ming-öi von Qizil: Proben aus der Fragmentsammlung SHT 25", *Indica et Tibetica: Festschrift für Michael Hahn*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, 66. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 351-368.

Schmidt, Richard. 1928. *Nachträge zum Sanskrit-Wörterbuch in kürzerer Fassung von Otto Böhtlingk*. Leipzig: Otto Harrassowitz.

SHT　*Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*. Teil I (1965) - Teil XII (2017), Ernst Waldschmidt et al., Wiesbaden - Stuttgart, Franz Steiner Verlag.

Skilling, Peter. 1994. *Mahāsūtras: Great Discourses of the Buddha*. Volume I, Texts. Oxford, The Pali Text Society.

Trenckner, V. 1880. *The Milindapañho being Dialogues between King Milinda and the Buddhist Sage Nāgasena*. Royal Asiatic Socity, London, Rep. 1928.

上野牧生 2015「アシュヴァゴーシャの失われた荘厳経論」『インド論理学研究』8: 203-234.

―― 2020「第29三啓経（八難経）の梵文テキストと和訳」『仏教学セミナー』111: (21)-(46).

―― 2021「増一阿含の二経典 (1) – 第30三啓経（五事経）の梵文テキストと和訳 – 」『大谷学報』101-1: (1)-(28).

上野牧生・松田和信 2021「アシュヴァゴーシャからヴァスヴァンドゥへ – 釈軌論と倶舎論に見る法滅観と馬鳴の詩作品 – 」『仏教学セミナー』113（近刊）.

榎本文雄 1985「『雑阿含経』関係の梵文写本断片 –『Turfan出土写本目録』第5巻をめぐって – 」『仏教研究』15: 81-93.

加納和雄 2020「中世チベット僧院における梵文写本の蔵書例 – チュン・リウォチェとポカン – 」『印度学仏教学研究』68-2: 194-200.

田中裕成 2020「三啓集に収められたサウンダラナンダの異読について」『佛教大学仏教学会紀要』25: 91–109.

能仁正顕 2002「菩薩思想の形成と展開」『親鸞と人間：光華会宗教研究論集』3: 183-222.

林寺正俊 2015「日本古写経本『三法度論』の成立：「三法度経本」の編集とその動機」『東アジア仏教研究』13: 119-133.

―― 2016「『三法度論』の基礎的研究：スートラの判別と内容梗概」『インド哲学仏教学

論集』3: 105-134.
平岡聡 2007『ブッダが謎解く三世の物語 ― ディヴィヤ・アヴァダーナ全訳』下巻. 大蔵出版.
平川彰1989『初期大乗仏教の研究 I』平川彰著作集, 第3巻, 春秋社.
藤田祥道2005/2006「大乗の諸経論に見られる大乗仏説論の系譜（1）『般若経』–「智慧の完成」を誹謗する菩薩と恐れる菩薩」『インド学チベット学研究』9・10合併号, 1-55.
本庄良文 2014『倶舎論註ウパーイカーの研究 訳註篇』上, 大蔵出版.
松田和信 2019「三啓集（*Tridaṇḍamālā*）における勝義空経とブッダチャリタ」『印度学仏教学研究』68-1: 1-11.
―― 2020a「ブッダチャリタ第16章に見られるアートマン批判」『インド論理学研究』12（未刊）.
―― 2020b「ブッダチャリタ第15章「初転法輪」 – 梵文テキストと和訳 – 」『佛教大学仏教学会紀要』25: 27-44.
―― 2020c「大智度論におけるアシュヴァゴーシャ – 如来十号論に埋め込まれた荘厳経論 – 」『印度学仏教学研究』69-1: (53)-(61).
―― 2021a「不浄観を説く中阿含139経 – 三啓集から回収された梵文テキストと和訳 – 」『佛教大学仏教学会紀要』26: 63-81.
―― 2021b「大智度論におけるアシュヴァゴーシャ – 戒論に埋め込まれた荘厳経論 – 」『印度学仏教学研究』70-1: (61)-(69).
―― 2022「アシュヴァゴーシャ・アンソロジー – 鳩摩羅什訳文献に見られる馬鳴の詩作品 – 」『佛教大学仏教学部論集』106: 21-38.
八尾　史 2013『根本説一切有部律薬事』連合出版.
吉元信行 1997「仏陀最後の旅と筏の譬」『佛教学セミナー』66: 1-27.
―― 2002「筏の譬」『櫻部建博士喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ』平楽寺書店, 1-22.